

若越郷土研究

46の1

グリフィスとその時代

—一八七〇〜八〇年代の明治日本—

山下 英 一

今を去る十五年も前、筆者は『明治日本体験記』という訳書を上梓した。これはグリフィスの『The Mikado's Empire』『皇国』から、その

の第二部を訳したもので、平凡社の「東洋文庫」の一冊として出版された。その「解説」のなかで、訳者は二つの記述について、自ら反省を促さざるを得なくなっていることに気付いた。その一つは、「しかし今日の目から見て『皇国』の価値は第二部にあると言えよう。」であり、他の一つは、「それにしてもなぜ『皇国』がこれまで日本語にならなかった

のだろう。」である。実は、この二つの記述は二つで一つなのであり、『皇国』の完訳がなされていない（名著の呼び声の高さのわりに）のは、その第一部の価値如何にかかわることであったと思ひ直されたからである。いや、今では筆者はこの第一部にこそグリフィスの日本について、耳を傾けるべき本領があるとみたい。ところがそれこそ、この本の特色と思われる歴史上の記述にあたり反感を持つ人がいたのも事実だ。ではどういう点が反感の対象になったのか。それを問題にする前に、この機会にグリフィスならびにその著書について述べておこう。

梅溪昇。氏は大正十（一九二一）年、尼崎市生まれ。京都大学文学部史学科国史学専攻卒業。大阪大学名誉教授。主な著書に『明治前期政治史の研究—明治軍隊の成立と明治国家の完成—』（一九六三）、『お雇い外国人—明治日本の脇役—』（一九六五）、『緒方洪庵と適塾生』（一九八四）がある。ここで話題にしたのは梅溪氏の論文「グリフィスの日本史研究とその歴史的意義—近代日本史学上より見

山下 グリフィスとその時代 —一八七〇〜八〇年代の明治日本—

たる』（一九六六）における氏のグリフィス評価である。これは日本英学史研究会の「研究報告」第六七号に掲載された、氏は主としてグリフィスの日本に関する代表的三著『The Mikado's Empire (1876)』『The Japanese Nation in Evolution (1907)』『The Mikado, Institution and Person (1915)』における著者の長きに亘る日本研究を真摯に読み、次のような結論を得た。「しかし、*naive historian*として私は、常に外国人によってなされた日本史研究を十分に参考にして、日本の歴史を見なおす習慣を身につけるために、また *naive historian* が自国の歴史なるがゆえに、おち入り勝ちな、独善的な見方にとらわれず、より客観的立場から、改めて日本史研究を深めて行くために、グリフィスを近代日本史学史の中に組み入れる必要があると信じている。」梅溪氏はさらに重大な発言を加える。「また国内の日本史家もことさらにその（グリフィスの—筆者注）業績を取り上げるのを回避したかのようである。」とし、その理由にこう述べる。「その当時の官学アカデミズムのもとにおいて、とくにかれの著作の内容に問題があると

されたことに起因したものではないかと、私は考えるのである。内容に問題があるどころか、内容の正当性についていくつかの点をあげてその意義を述べたのがこの論文である。

亀井俊介。氏は昭和七（一九三二）年、岐阜県中津川生まれ。東京大学英文科卒。東京大学名誉教授。比較文学、アメリカ文学に関する著書が多い。『近代文学におけるホイットマンの運命』（一九六九）、『アメリカン・ヒーローの系譜』（一九九三）。亀井氏には『ミカド―日本の内なる力』（一九七二）という訳書がある。先述したグリフィスの『*The Mikado, Institutional Forces of Japan: A Study of the Internal Political Forces of Japan*』（Princeton University Press, 346pp.）の完訳であり、グリフィスの明治天皇論である。氏にとってこの仕事はアメリカ人の日本論という興味ある研究テーマの一つと考へてのことであつたらう。そして次のような感想を述べるに至る（「あとがき」）。「ハーインの著作が非常に高い位置にありながら、グリフィスのそれが従来ほとんど顧みられなかったことは、バランスを失したことのよう思われる。明治時代の知日的アメリカ

人の真骨頂を見たいなら、グリフィスの本こそ繙くべきではないだろうか。亀井氏はこの訳本の「序」を書いた木村毅氏に深く感謝するとともにこう記した。「グリフィスの本の価値を従来もつとも強く説き続けてこられたのは木村氏であり、この序文はグリフィスに対する氏の敬愛と見識の表現である。」

木村毅。氏は明治二十七（一八九四）年、岡山県生まれ。昭和五十四（一九七九）年歿。早稲田大学英文科卒業。明治文化研究と文化交流に寄与した。著者は『小説研究十六講』（一九二五）、『日米文学交流史の研究』（一九六〇）。氏は亀井氏のこの翻訳に我が意を得たりと拍手を送った。というのも、「じつはこの書は、日本歴史に対しても、天皇に関しても或る部分は、大胆率直に、歯に衣させずして書いています。そこで、たとえこの書の内容を知っていたとしても、戦前はアカデミックな学者の、とうてい手を触れ得ない内容をあかむ」書であるからだという。木村氏はさらに語気を強めて「序」を結んだ。亀井氏の訳文は「たいへん手ざわりの柔かな文章で、読みやすく、わかりいい。」と云って、「ここでも

今の学界とくにマルクス学者亜流の肩を怒らした文章をアカデミズムの見本と心得ているような弊風を脱し、学者的臭気を全く帯びていない。肩のこらない好読物として江湖にすめる。言うならば外人の書いた唯一の明治天皇論がこれだ。」

斎藤静。氏は明治二十四（一八九一）年、宮城県生まれ。昭和四十五（一九七〇）年歿。京都大学英文学選科卒業。福井大学名誉教授、英語学者。『雙解英和辞典』（一九四四）、『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』（一九六七）。斎藤氏は福井中学校英語担任教諭であった昭和二年、グリフィス夫妻の福井訪問の際、福井中学でのグリフィスの講演の通訳をした。その機縁で氏はグリフィスの『皇国』第二部の福井滞在に関する部分を翻訳、これを記念誌「グリフィス博士の見たる維新時代の福井」として福井中学校校友会が発行した。当時三十六歳の少壮気鋭の英語学者が、日米関係の正常化に役立つと八十四歳の老躯に鞭打つグリフィスの熱意に感動を受けたに違いない。またグリフィスも斎藤に誠実な人柄を見たと思われる。二人の交流は続いた

らしい。母校東北学院大学図書館所蔵の斎藤静文庫にグリフィスの著書八冊が入っていて、その一冊 *The House We Live In* (1914) にグリフィスの大字のペンで *To Mr. Shuzuga Saito, with the compliment of the author, Wm. Elliot Griffiths, Pulaski N.Y. Sept. 13, 1927* とサインが入っている。東北学院はアメリカのオランダ改革派教会の宣教を基盤とするミッション・スクールであった。そこで学んだ斎藤は信仰と苦学の青年であり、その人生がこの学校で決定づけられた。グリフィスもまたオランダ改革派の発生になるラトガース・カレッジの信仰厚い苦学生であった。おそらく二人は語り得ずして信頼と友情を持つことができたと思われる。昭和二十七年、斎藤は「グリフィス博士」(「福井県文化誌」第一輯)と題する小伝を書いた。グリフィスについて書くべきことは多いと限りある紙数を残念がりながらも当時としては充実した年代別の著作リストを上げていた。「ウィリアム・エリオット

・グリフィス博士は日本を正しく世界に紹介し、正しく理解させるために全生涯を捧げられた大親日家であり、我々の大恩である。」¹⁾ 齋

藤氏のこのグリフィス賛辞には一点の曇りもないものと信じる。氏が世辞に長けた人でないことは、氏の学問にたいする態度を見ても首肯できる。いわんや官字アカデミズムの学者の排他的な優越感におよそ無縁な人格の持主であった。

以上、四人の学者に登場してもらって、日本歴史、日米文化交流、明治文化の立場からグリフィスの日本学の意義を再認識するための強い味方になってもらった次第である。ここでははじめに述べたように、これから *The Mikado's Empire* (以下MEとする)の第一部について、今回は紙数の都合で全三十八章中、第一章 *The Background* から、第二十一章 *Life in the Middle Ages* までの記述を研究の対象にする。なおこの書の米国での反響については次回に述べたい。

一 外国の歴史家が日本の歴史を完全な形で書く仕事に必要な資格について、グリフィスは次の四つをあげている。

一、日本、中国、朝鮮の言語と文学の知識。

マラヤ群島、シベリア、北太平洋の島々の方言の知識。二、歴史的洞察力。(*historical insight*) 三、共鳴。(*sympathy*) 四、批判的な眼識。(*judicial acumen*)

そしてこれらの条件がMEのなかで如何に顕現されているかを見て行くのだが、その前に、この書の題名に関するグリフィスの説明と口絵について述べよう。日本を指す表現としてグリフィスは日本の文学で見つけた呼称、耳にした呼名で十六の別称をあげる。一、日本(にほん、にっぽん)。二、大日本国。三、大八洲之國。四、磯駈慮島(おのごろじま)。五、敷島。六、豊原秋津國。七、豊秋津國。八、豊葦原國。九、大倭之國。十、扶桑國。十一、御國。十二、神國。十三、神の國。十四、蓬萊の國。十五、皇國。十六、帝國日本。このうち「神國」(*Land of the Holy Spirits*)、「神の國」(*The God-land, or Land of the Gods*)、「皇國」(*The Mikado's Empire*)、「帝國日本」(*The Empire ruled by a Theocratic Dynasty, or, Japan, the Empire governed by Divine Rulers*)というように同価値の英語と対応させている。さらに「皇國」には *land ruled*

山下 グリフィスとその時代 — 一八七〇〜一八〇年代の明治日本 —

by a Theocratic Dynastyの補足がある。つまり神政にしてかつ世襲的な主権者の治める国の意である。グリフィスの文章にいきなり、といっても唐突ではないが、彼自身の現今に立っての考察が採用されてくる。過去と現時と結んで遠近法的にその歴史について洞察力を働かすのである。ここでも明治天皇が肖像画とともに早くから頁に登場する。このことがまたグリフィスのMEをはじめとする多くの著書を読んで面白いものになっている。つまり「私」という著者自身の顔が、歴史を書くという作業に浮んでくる気安さがある。「皇国」にもどう。明治の文明に入って、神権主義(The doctrine of divine right)が一世紀前から忘却されてきたにもかかわらず、いぜんとして、日本国民はミカドの神性を宗教上の教理として、国の原動力にしている。その上、使節の派遣にもミカドの信任を必要とし、外国の外交官に天皇(the King of Heaven)と呼ぶよう求めている。こういう旧体依然の「皇国」を観にたいして、グリフィスの使う「皇国」とは「皇」と「国」が一つに結合した漢字であるが、その意味するところは、神政(theocracy)

でなく、ミカドの人格を強調した、人格化されたミカドの国をいう。他方「帝国日本」という紋章には神格(Dety, or divine government)の支配する国という考えがあるという。このいわばグリフィスの理想は終生かわらぬ信念となった。先述した晩年の著作The Mikado, Institution and Personがそれであった。

次に口絵へ移ろう。「日蓮を北条の死刑執行人の手から救出」と説明の入る絵は、「竜ノ口の法難」として知られる迫害の場面である。MEの本文によると、所は鎌倉の先の村で、江ノ島が前に見える。その浜に坐して日蓮上人が数珠を手に南無妙法蓮華経を称えている。死刑執行人が右手にした刀を打ち落とそうとする瞬間、空から目も眩む光の洪水がふりかかり、刀は碎かれるが、上人は無事であった。絵の方は暗い浜に坐して祈る(数珠がない)上人の上から光が洪水のように流れ落ち、そのなかの武士の右手の刀は真二つに折れて、身体は硬直して見える。馬も前肢を上げて怖れおのき、馬上の検死役人は投げだされる。ここで興味あることは、「皇国」という題名の書の口絵に仏教の法難の場面を

持ってきた著者の考えは何かである。MEの「日本の仏教」の章で、グリフィスが「日本の仏教は徹底的な研究に十分に値する」と明言していることから察しがつく。そしてその理由として、「日本文明を構成するあらゆる要素のうちで、仏教(the religion of Buddha)ほど日本人の性格の形成に影響を及ぼしてきたものはない(『大陸文明の伝来』の第八章)との意見があげられる。では何故、日蓮なのか。いうまでもなくグリフィスはキリスト教徒として、米国のオランダ改革派教会(カルヴァンのプロテスタンティズムの教義を信奉する)に所属していて、その立場からと(しかし宣教師ではない)、神道との関係からも仏教を対比して考えざるを得ない。グリフィスがMEでとくに宗祖のなかで選んでその生涯を記述したのは日蓮と親鸞であった。その日蓮の築いた宗派の他派に優る点を上げる。まず改宗させる熱意、議論のきびしさ、宗派の頑固なこと、狭量な尊大さと続き、おそらく六世紀の間に、才気のある識者、妥協しない熱狂者、ひるむことなき殉教者、冷酷な迫害者を多く輩出した宗派は他にない。従って、

日蓮ほど日本の宗教的知性に深い印象を与えた宗祖はないとグリフィスは判断した。その上さらに無徒な予言になると断つて、日本におけるキリスト教を妨害する最も活発で根気強い宗派は間違いなく日蓮宗であると書いた。ということは逆も真なりで、日蓮宗にしても同じことがキリスト教にたいして言えるように思えてくる。先述した研究者の条件の一つ、共鳴(sympathy)ということになろうか。すなわち口絵のものがたる信仰の奇跡はキリストのそれと相通するものがあつた。そのことにグリフィスは共鳴したと考えられる。そこで思い出すのが、キリスト信仰者内村鑑三の「日蓮上人を論ず」(明治二十七年)の文章である。内村によると、竜ノ口法難の宗教的事実はいかなる批評的歴史をもつても少しも疑うことはできない。内村はまた釈迦の仏教に多くの宗旨のあることに最初の疑問を起こした日蓮に深く同情した。キリスト教の場合も宗派に分かれていることに内村自身が大いに疑問を感じていたからである。「彼に忿怒めり、熱涙あり、狂ならざれば信、信ならざれば狂、聴衆の多数は狂と決せり、予言

者は故郷より遠い出される。」このように日蓮の生涯を追及する内村の文章は劇しい。その背景にはイエスの伝導の苦難への熱い思いがあつた。今、内村の日蓮上人論を精しく述べるのは差控えたいが、「大敵を有せざる人に余輩は巨人の名称を附せず」とか「宗派政權に依り頼んで腐敗せざるはなし」といった批判的言葉には、日蓮の仏教改革にたいする全幅の共感と賞賛が籠められている。「日蓮上人を論ず」と同じ頃、すなわち日清戦争の前年、内村は英文による、*Saint Nichiren - A Buddhist Priest* を書いていて、翌二十七年出版の自著 *Japan and The Japanese* (明治四十一年、訂正改版 *Representative Men of Japan* と改題される) の一篇とした。そのなかで内村は「竜ノ口の法難」は、日本宗教史上、最も有名な出来事であると述べて、その話を簡単に記したあと(内村によると刀は三つに折れる)、これは奇跡と切り離しても、仏僧の生命を奪うことは天罰をうけるという迷信的な恐怖からでも説明できるとしている。しかし筆者はこの場合、内村の合理的な見方よりもグリフィスの共鳴に同感したい。実際、グリフ

イスは日本に滞在中、日蓮にゆかりの場所をとくに訪ねていて、日蓮の仕事や門徒たちについて感銘を受けている。MEによると日蓮が入滅した池上(東京都大田区池上)の長栄山本門寺の場所は、横浜と東京の間で、川崎駅の少し北西寄りのところにあり、その荘厳な境内にいと、機関車の汽笛と汽車の走る音がほんのかすかに聞こえてくる。繰り返してグリフィスはいう。日本の民衆の純粋な宗教的性格は迷信的性格とともに何よりも仏教の影響を受けて育かれ発達してきた。そしてどんなに浅薄な日本人研究者でもこれは認めないといけない。MEの出版から十九年後の一九〇五年、グリフィス日本仏教研究の大著 *The Religions of Japan* が陽の目を見たのである。

二

The Mikado's Empire の第四章、*'Japanese Mythology'* の第五章 *The Twilight of Fable* は神話がテーマである。古事記と日本書紀に表れる日本人の創造の組み立てが造物主(神)なしに始まる。すなわち宇宙は物質とは別と

いう考え方(キリスト教における神の天地創造を指す)は日本人の哲学的体系と相いれないことをまずもってグリフィスは指摘する。

伊弉諾尊、伊弉舟尊のもうけた天照大神ら神々の家系であるとする事実から、日本人の勇氣と知性は他の国の人々よりも測り知れぬほど優れていることになる。そこでグリフィスはいう。こういう意見がまだ狂信的な神道学者(国学者)のなかには残っていて、それを理由に、それまでの十年、外国人にたいして激しい憎しみと侮りを表わしてきた。本居宣長の『古事記伝』のことも知っていたグリフィスだが、神話としての古事記が日本の芸術の土壌になつていと認めつつも、これが家庭で読める削除なしの本に平易な英語で翻訳するのが無理なのを残念がった。彼は日本の神話がその道徳的に固有の国民性に影響を及ぼしていると述べ、日本の芸術、古代や現代の生活を学ぶ者にとつて、日本人のなかに原始文化の遺物を発見したり、彼らの習慣のなかに、古代人の風習や儀式の跡をたどつたりするのは最大の楽しみであると言ふ。天の岩戸の神話を物語つたあと、例えば岩屋の前の

天鈿女命の踊りに、日本の村や町の通りでグリフィスが見て楽しんだ身ぶり手まねの踊りが似ていると想像する。そしてこれらの遺物は「急ぎの旅行者や、日本に住む目的があまりないだけの外国人には、つまらない、無意味なものであつても、日本人を見る目や理解力のある外国人にとつては、古めかしく、神聖な、無垢の喜びを生み出し、本来、強烈におもしろい日本人への新鮮な驚きと喜びの源泉となる。」との見方を示した。しかしまたグリフィスは古事記の記述を日本の正しい歴史ととる愛国的な日本人や熱心な神道家にたいして、外国人の冷静で覚めた目には、皇室を高揚するために人間の作つた發明とうつると直言する。その記述はあくまでも時を経て形を失つた事実にあつた空想の生きた豪華な産物というわけだ。神武天皇は記紀の伝える初代の天皇だが、グリフィスによると、留學したことがある、または、そうでなくても古

い信念を放棄して、近代のニヒリズム精神を吸収した多くの日本人学生は、神武天皇を神話の人物と見ている。数年のヨーロッパ生活から帰つたばかりの若い日本人学生が、最

近、ミカドの神性と古事記の真理を信じているといふのでからかわれた。「信ずるのが義務である」がその学生の最後の答えだつた。

外国のすぐれた学者、批評家は神武天皇は神話の人物と考へている。ところが日本武尊について、グリフィスは歴史上の人物であり、その行動は実際の歴史の一部であり、武士道(The Japanese military spirit)と因果関係があるとして、その生涯を記述する。なかでも信濃の高原の道なき道を軍勢をひきいて進み、碓井峠を超えて関東の地に入るまでの描写は苦難の切迫感があつて見事である。彼等の迷信的な空想にとつて、山という山が神の住居であり、あらゆる洞穴、隘路は御霊の潜伏所であつたとグリフィスは同情を惜しまなかつた。それもそのはず、南校教授グリフィスは一八七三年の夏休みに、この日本武尊の旅したところを自分も越えてきた。MEの註に、越後の高田からいくつもの峠を超えて、武蔵の東京まで歩いたが、日本武尊の成功はその勇氣、技量、大胆不敵さ、忍耐、ロマンチックな好奇心のせいだと考へるといふ。そして実際に見たのは、富士山、浅間山、八ヶ岳の

美しい景観、低地の上野(こうすけ)での養蚕

三

と最高の絹の生産であった。この旅の行程と感想がグリフィスの日記(ラトガース大学、グリフィス・コレクション所蔵)に手短かに書いてある。参考までにそれをここに写してみよう。July 18—Aug. 14. We made a trip via the Hakone mountains to Shizuoka, Nagoya, to Kioto, where we spent three days, visiting the tea-district, and the famous places in the city of the mikados. Thence we went by Lake Biwa and Tsuruga to Fukui, staying two days, thence to Kanazawa, thence along the sea-coast to Takata in Echigo, up and over the mountains and table land of Shinano, thence past the volcano Asama yama, via Takasaki to Tokio. The general prevalence of the jinkishsha enabled us to travel rapidly and to spend time in important places. No one attempted to molest us but the fleas, and these we kept at bay with powdered camphor, of which we could buy a pound for five cents. The entire distance traversed was about 900 miles. (「我々」とは、グリフィスと姉の東京官立女学校校長マーガレット)。

第九章 'Life in Ancient Japan' 第十章 'The

Ancient Religion' は神道についての議論である。まずその成立についてグリフィスはこう考える。神道の基礎になったものに、浮動的な伝説、地方の伝説、原住民の宗教思想があり、それらが一つになり、優勢な種族によって拡大されて、神権政治の教義として変形、統一された。その上に中国の天地創造と抽象的な哲学思想が修正されてつき木されたという。ここでの原住民とはアイヌ人のことで、第二章 'The Aborigines' のなかでグリフィスは日本人の最初の先祖をアイヌ人と信じていた。しかしのちになって、日本人を合成しているなかに、少なからずアイヌの血の一滴が混じっていると直している。(出典は、*The Mikado's Empire* の続篇ともいふべき貴重な書で、日露戦争後の一九〇七年に出版された *The Japanese Nation in Evolution* である) 古代における政治の主権者に備っている威信を、依然として日本人の最も著しい国民性になっっているミカドの神性と超人的な主権が生垣で囲むという観念が育っていった。ミカド

の神格化である。このように不完全だが原始的な日本を描いたグリフィスが、ここに用意させる。すなわち、一方では、先祖を育んでくれた国を、信心厚く大事に思い、彼等の武勇や信心深い生涯の話を聞くたびに感動する。他方、冷酷に、批評的な眼で、ひたすら真実をほじくり探し、その上に安心を求める教義を認めない。そういう外国人には日本は単に地球の地理学上の一部で、その起源は未開状態に過ぎなかった。しかし件の日本人にとって、日本は神々の国であり、原始時代は神聖であったのだ。神道には道徳律の *moral code* がない。だから神道は宗教ではないと外国人はいうが、神道の偉大な復興論者とグリフィスの評する本居宣長の考えによると、道徳は中国人が発明した、というのも彼等が不道徳であったからで、日本人は道徳を組織化する必要はなかった。彼等は自分の心に問いさえすれば正しく行動したからであった。すでに福井の教師でいた一八七一年に、グリフィスは神道の印象を米国の *The Independent* 紙へ寄稿しているが、それから五年の比

較研究を経てその印象は変わっていないとして、MEにその記事を引用した。「高い次元では、神道は教化された知的な無神論(atheism)である。他方、低い次元では、神道は政府と聖職者の命令への盲目的遵守である。」また彼が福井や東京で日本の学者や神道の役人から得た一致した意見は、「神道は宗教でない。それは国家統制の一制度であり、国民の間に、愛国心を絶やさぬようにするのに好都合である。」というものであった。このグリフィスの観察と批評に関連してひとつ卑近な例をあげたい。今、手許に昭和十一年発行の『日本精神』という、学友会という組織が編輯した一冊がある。神道は日本精神の根幹であるとする思想に立って、歴史的、伝統的な規範をあらゆる角度から取り上げ、徹底させるのに便利な形にしてある。そのなかに、「橘曙覧の尊王敬神の歌」という一章を見つけた。

「国学の研究は彼の魂に古代精神(皇道精神)を植えた云々」といった説明があり、十首の歌をあげているなかに、「たのしみは神の御国の民として、神の教をふかく思ふ時」、「たのしみは戎夷よろこぶ世の中に 皇国忘れぬ人を見る時」(「獨樂吟」からの二首)があった。先の一首の「神の御国」は皇国を指すという説明、後の一首の外夷を崇拜する間違った人々といった解釈には、著者のいわゆる日本精神即ち神道の思想にこれらの歌を短絡に結び、いわば牽強付会の難はまぬがれない。しかしグリフィスのいう低い次元の神道が彼のいた日本ではあたり前になっていて、もし神道におけるミカドの神性の教義と日本国民が盲目的にミカドに従う義務とを除くとしたら、その時代の神道から残るものは何かといえば、中国の天地創造、地方の神話、儒教道徳であるとさえグリフィスには思えた。

四

神話の時代から想起して、日本の古代から中世に至る歴史のなかの自然と人間と思想のつながりとその変遷の諸相を、グリフィスの著書『The Mikado's Empire』のなかから見てきて、途中であるがこの辺で、彼が日本人の国民性、特徴、気質に触れた文章を列挙することにしたい。一、先史時代から島の原住人は魚という脳の栄養になる食物を主食にし、有史から気転のきく本来の日本人に至るまで、魚が日常の食事であった。一、草木の壮観、景色の壮麗、空気と気候の絶妙に穏かなこと、これらが相まって人間の心持ちを和らげ、活発にする。(以上、第一章『The Background』)一、仏教は、新しいより大きな制裁、因果応報、動機、実際の教学、道徳律を持つてきて、個人の全性格を発達させ、広げるだけでなく、国全体を前進させることができた。(第八章『The Introduction of Confucial Civilization』)一、八世紀末、有能で武術、馬術に長ける金持の農民が武士階級を構成し、残りの力のない農民は土地を耕し、農業に従事すべきことを宮廷が決定した。このことは日本の歴史上、最も重要な変化の一つである。(第十一章『The Throne and the Noble Families』)一、日本における縁者びい(quipponism)は一種の科学(a science)である。(第十五章『The Glory and the Fall of the Heijō Family』)一、皇室の威信の強さを計算に入れず、国民の胸中を占める玉座とミカドの場所のあることを認めないで、日本人とその独特の歴史を研究しようとする者は、日本人もその生

活も決して理解できない。(第十九章 *The War of the Chrysanthemums*¹⁾一、八世紀から十六世紀(中世)にかけて、日本人の知性、想像力、社会経済、工芸の独特な発展があり、この閉ざされた国は地上で二つとない国として、その工芸品は世界の驚嘆の的になった。

一、日本人くらい作法の上品で洗練された国民はない。一、日常生活のなかの欲求、感情、関心など人間の心の最も深いところにあるものを表す言葉は大体、その国に生まれた言葉であり、技術語、科学語、抽象語は外来の言葉である。従って、音楽的な美しい日本語の泉を見つけないと思つたら、この島帝国(*The Island Empire*)の母たちの心のなかにその泉を求めて、その唇から泉の流れる音を聞かねばならない。日本語を文学語にしたのは男ではなく女の天才であつた。(以上、第二十一章 *Life in the Middle Ages*)これらの引用だけでは十分にグリフィスの文意を分かつてもらえないだろう。例えば「日本の工芸品」のひとつに梵鐘がある。日本の寺の鐘のやわらかで美しい音楽くらい荘重でよい調子の音は無いと述べたあと、静かな夜、周囲二十マイル

に響きわたる増上寺の大梵鐘に移り、人々は鐘を生涯、親友のように愛するといつて、最後に、梵鐘鑄造の儀式を生き生きと描写した。一事が万事、グリフィスの表現には洞察力と集中力があることを知つてほしい。

歴史を書くとはどういうことだろうか。まして一つの外国の人々の歴史を、あたかも教科書のように通史として、しかも一人が書くとはどういうことか。それが一八七六(明治九)年に米国人による日本及び日本人の歴史の書となつて実現したのである。この米国人グリフィスは明治四年、越前福井の藩校で化学、物理学を教えたが、地質学の専門的な知識もあつて、藩庁に「ニュージャージー州の地質」(*N.J. Geology*)を贈つたり(ラトガース大学でクック教授の下で M・A の学位をとつた N・J. の地質測量の論文、着任一カ月後には、近くの山で石炭探検の地質調査をしていた。ME の例では、伊豆半島の上部に山脈があるが、これが信濃の台地に向かつていて、日本を東西に分けると書く。つまりグリフィスのこの著書は三十三歳という年齢であるが、広くて正確な知識なしには為しとげられ

なかつた。歴史の一頁の研究をもつて専門を名乗る今日の学界と違つて教養的で誠実な学究の所産であつた。最近、歴史家網野善彦、文芸評論家三浦雅士対談(講談社「本」二〇〇〇年十二月)を読んでいて面白い記事があつた。いかにも付け焼刃で気が引けるが、思い切つて引用する。網野氏「明治初期には、江戸時代以来の学問を生かしながら歴史学、人類学を発展させようとする試みがなされてきました。ところが明治後半から大正期にかけて、アカデミズムの学問が確立するとそうした要素はバツサリと切り落とされてしまいました。」筆者は日本の歴史学の家庭の事情は全く知らないが、またしてもアカデミズムで、これは学問の自由の前に立ち塞がるものらしい。網野氏。「近世の書誌学、書物についての研究はもつとやらなければならぬ。例えどとがある筈だと思つたのですけれどね。例えば旧家に行くと、蔵に膨大な書物が残つていますが。ところがこれまでの歴史家はそういうものには目もくれず、文書ばかりを漁つてきたのです。そもそもなぜこれほど多くの書物がこうした旧家にあるのかを含めて、その内容

に即して研究すべきことは非常にたくさんあると思いますね。」筆者も英文の文書を大切にして研究に利用させてもらっているが、書物の人間におよぼす影響の計り知れないことを少しは知っているので、貴重な意見である。三浦氏。「ずっと考えているのですけど、文学とは結局歴史ですね。人間の意識とはどんなものか、最後の最後に分かるのが歴史だと思っんです。だから最終的に文学は歴史だし、歴史は文学に収斂する。」これなどよく聞かれることだが、やはりそうだと思う。The Mikado's Empireの最大の特徴は読む者の心をひきつけるその文章力にあると筆者は思う。グリフィスは中世の歴史の参考に頼山陽の『日本外史』に大いに頼って書いた。その書物こそグリフィスが外国人の日本研究者に必要な四条件の第一にあげた「その国の文学の知識」の「文学」であった。グリフィスによると『日本外史』は宮廷の外の主として戦争の出来事を扱っているが、もう一つの著書『日本政記』は宮廷の禁中の事件を扱っているという。日本の歴史、公用語、文学、礼法には活動の範囲、処理の種類がいずれも二つ

に分かれていて、それを扱うには二つの方法が要る。つまり「内(ない)」と「外(がい)」という二つの概念が存在すると指摘した。しかし『日本外史』の物語る戦乱の歴史をつづるのが目的でない。「平和の勝利は戦争の勝利の名声にまさる」ものであった。従って、天皇の反逆者、囚われの身、刺客の詳記より、野蠻から文明に至る進歩が示めす日本人の生活の研究の方が面白い。すなわち日本人の身分、生活様式、風習、思想、信仰を取りあげて書くことが目的であるとの歴史観がグリフィスの信条であった。外国文明の移入ということでは、三つの大きな波が来た。その第一波は、六世紀、朝鮮を通り中国から、第二波は、十五世紀、西ヨーロッパから、第三波は、ペリーの到来(Shimada)から十年間、欧米、世界各国から来た。第一波はいうまでもなく仏教であるが、ただ採用したのでなく、日本人の精神のなかに最初からたくわえてあった思想の上に接木されて、日本の土壌に根付いた。しかしこのように日本化されるには、重大な修正と過激な変化に耐え得るだけの性格が、本来、日本人に強固に備っていたからだ

とグリフィスは考えた。西暦七十六年、中国からの使節が百七十八人の従者と乗組員を従えて、光仁天皇を表慶に来たところ、船が台風のため越前沖で難破した。一行のうち四十人が救助され、越前で食物を与えられ保護された話を、グリフィスは『越前国名蹟考』から引き、さらに、七十九年には、中国から帰った日本使節が福井の港としての三国に上陸したとも引用した。グリフィスはこのような日本と中国の友好が十二世紀になって途絶えるまで、親善関係のあったことを例証した。蒙古来の起るのは十三世紀の後半、戦況を描写する筆致は挿絵も入って、躍動感にあふれ、さぞかし外国の読者の共感と呼んだであろう。しかしグリフィスが問題にしたのは、いわゆる神風である。『日本外史』のいう、「時宗による野蠻な蒙古人の撃退と、天子の国を守ったことで、十分先祖の罪滅ぼしになった。」(グリフィス訳)それが外夷ペリーの到来では、「宮廷から伊勢の神宮へ、外夷を一掃するための祈願をささげる勅命が下された。」(日本人歴史家の言葉とあるだけ)。この六世紀を経た二つの文章は、時間の推移

とは反対に一貫して変らない一つの思想のあったことを、グリフィスの皮肉な目はとらえていて、それを読者はユーモラスに感じていたであろう。(第十二章 *The Invasion of the Mongol Tartars*)¹ すでに見たように「内」、「外」の二つの概念、つまり二元に構成されたもののなかに、政治上の二重構造(*duality*)、京都のミカド(御醍醐天皇)と鎌倉の征夷大将軍(足利尊氏)があった。しかしミカド(天子)の威信は衰えなかった。外国人でミカドの人格に具っている威信を十分に理解するのは難しいとグリフィスはいう。ミカドの實力、性格のいやしき、能力のとるに足りなさがどんなに低くても、ミカドは天子であり、その言葉は法、命令は全能であった。しかし、今や対外関係や外国人の居住といった条件が変ってきて、国全体の共同戦線より以上のもので、政治的な外圧に対処する必要がある。それがグリフィスのいうミカドの政府(*the present mikado's Government*)であった。

五

The Religions of Japan の序文のなかで、グ

山下 グリフィスとその時代 — 一八七〇〜一八〇年代の明治日本 —

リフィスは、越前を仏教の根拠地の一つであると述べ、その福井生活の一年は神道と仏教の形態や民間伝承を学ぶ機会が多かったと云って、あらゆることで日本人はあまりに宗教的だと論じた。福井が真宗の盛んなこともあって、MEでは開祖親鸞の生涯、教義について書き、真宗の特徴を純粋な意味の「新教」(*Protestantism*)と呼ぶ。すなわち、それは思想と行動の自由、政治や伝統や超聖職主義や神道の影響のない、強制されたくない心をさす。しかしグリフィスの心を最もとらえた人物は日蓮であった。日蓮宗の信徒の迷信的行為には、荒々しくて不快なものもあるが、他方、その信仰と慣例のなかに「流れ勧請(*nagare kanyō—flowing invocation*)」というような風習(主として日蓮宗)もあると云って、特にそれを取り上げて、風習の形態と意義について詳述する。グリフィスはそれが越前のいなかの町や村で堅く守られているのを見た。東京市中で探したが一つもないという。これには大沢南谷(グリフィスが雇った絵師)の画が入っているが、越前の武生の近くでグリフィスの見た一つを書いていた。グリフィスが

the mother's memorial (「母の請願」と呼ぶ「流れ勧請」とは。一枚の木綿の切れの四隅をそれぞれ棒に掛け、それを小川の辺の地面に置く。その後ろに少し高い薄い木片を立てる。その先端近くに刻み目があり、簡単な銘がしるしてある。切れには木の柄杓が置いてある。四隅のまつすぐな竹の棒に花束が供えられることもある。この奇妙なものに気づいて、それらの部分を少し調べる人は、そこに死の象徴性を見出す。銘の不吉なサンسكريット文字は死の知らせ、咲いた花は墓地の墓に捧げて遺族が故人をなつかしむもの。切れには故人につけられる名と「南無妙法蓮華経」の祈りが書いてある。数分も待つと、一人の通行人が立止り、数珠をかけて熱心に祈り、うやうやしく柄杓一杯の水をくみ、切れの上で、水がしみ通るまで気長に待ってから、出かけて行く。この意味するものは何か。グリフィスはこれを身代りとなった受難、喜びの瀬戸際の悲しみ、一人の生のため一人の死の痛々しい話と理解して行く。母の愛と母の悲哀について語っている。仏の慈悲による通行人への無言の訴えが、苦しむ

魂の受けるたたりを短くする話であることが分かる。さらに言うと、お産で死ぬ母親は、そういう死による、何か恐しい罪のために、死んで後も長く輪廻を経験するかも知れない。そのため母親は産まれた子をその欢喜でいっぱいのうちに残して、地獄の闇に沈み、血の湖にころげ回らねばならない。そのうめき苦しみは、象徴的な切れのすり減って、「流れ勸請」が終るまでつづく。そうして水が筒抜けになると、罪が清められて、救われた母親の霊はよみがえり、より高い輪廻の高位の霊のなかに入るのである。しかしこの罪滅しにもつとも深く同情するのは子をなくした母親である。そしてこの光景はグリフィスのような外国人の心にも暖かい同情を起すという。さらに一言加えて、祈りと故人の名を書いた切れは寺で買えるが、金持ちのは二、三日で破れて水が落ちるのがあるという。貧しい者は丈夫で目のこまかい切れしか買えない。そして身分の低い方が大邸宅の金持よりも、母親の悲しみや喜びを感じている情け深い女が多いということも。グリフィスの「流れ勸請」にたいする共感はいったいどこから

来るのであろうか。たしかに原罪、受難、復活といったキリスト教的なものとの共通性はある。またグリフィス自身の家庭の貧しさ、多くの兄弟姉妹、母の愛情、福井滞在中の母の死を思い出させる。しかしそれ以上に日本の仏教のこの小さな儀式に寄せる暖かい同情は万人のものであった。おそらくこれらの仏教の知識を今立吐醉から得ていた。MEによると福井の元、僧侶とあるは吐醉のことである。(拙著『グリフィスと日本』—近代文藝社、一九九五年。第三章(三)「今立吐醉とグリフィス」参照。なお平凡社大百科事典の「流れ灌頂」(ながれかんぢょう)から以下の文章を参照。「真言宗で最も略式なのは、四角の白布の中央に阿字を、四隅に△迷故三界域△などの文を記し、4本の棒で水辺に張り、そばに柄杓をそえておき、通行人に水をそそいでもらうようにする。」

六

「戦争は規則、平和は例外」とグリフィスの書いた足利時代はまた「犯罪と乱世の黄金時代」(It was the Golden Age of crime and anar-

chy.)であった。(第二十章 The Ashikaga Period)。しかしすでに日本人の国民性について列挙したように、中世の人々の文化面における大きな発展のあったこともグリフィスは忘れたかった。「平和の勝利は戦争の勝利の名声にまざる」(Peace had its victories, no less renowned than those of war. 第六章 Suin The Civilizer)からである。この小論で筆者が予定した中世の終りまでどうにか辿り着いたようだ。話が堂堂巡りした嫌いがあるが、これはグリフィスの記述にある同時代の目で過去の歴史を洞察しようとする特色にも因る。とくにミカドの神性についての歴史的考察は、The Mikado's Empireの最大の課題であるだけに、機会を見ては論ぜられた。批判的な意見もあり、好意的な同情もあったが、概して困難なるが由に混乱におち入っている。これは仕方のないことであった。もうひとつ、仕方のなかったことというよりこれがこの書物の特色といたいだが、話を身近かな観察や経験に持つてくることである。しかもここが重要だと思われるのは、新しいこと奇なこと共感、共調の精神であたっていることである。

どちらかというところ、相違とか差異の方が分かり易いこともあって、違いを強調しがちで、実は共感の方が難しいのだ。しかもグリフィスの感性には文学者いや詩人の要素がある。というのは発見のおどろきであり、思わぬところから持ち出して二つを一つに結ぶ思考が働くのである。見方が差異でなく二元性なのである。ものの「内」と「外」への二つの配慮を怠らない。グリフィスは歴史の専門家ではなかった。日本及び日本人について自分の目で、心で知りたかっただけである。それに、想像力だ。固定した考えを極力、排斥した。その文章から受けるものは、弘法大師の錫杖が清水を湧出させるように、また探石人が原石を見つけるように、今だに新鮮な発見の原型(prototype)である。